

# 診察室から @ 埼玉

## 子どもの心身症

# 体に現れる、こころの不調

2009年12月、独協医大越谷病院の小児科から独立して、子どものこころ診療センターが開設されました。ここでごどんな診察をしているのか、日頃の外来の1コマを再現してみます。

小学6年の男の子は、青白い顔色でうつむき、母親と一緒に診察室に入ってきました。母親は「毎日、朝になると気持ちが悪いと言って、ひどいときには吐いたり、下痢をしたりするんです」。そして「実は、半年前から登校していません」と言います。学校に行っていない間は、ずっと家において、ゲームをしていることが多く、明け方に寝る

ため、息子が「何時に起きるのかわかりません」とも。この家庭は母子家庭で、日は子どもだけで過ごしていました。さらに詳しく聞くと、3歳くらいのおきに言葉でうまく思いを伝えることができず、よく癩癩かしくを起こして、幼稚園時代も一人遊びが多かったそうです。

この子の問題点を整理してみると、①朝になると消化器症状が著しい②不登校状態③昼夜逆転④ゲーム依存⑤幼児期から対人関係や社会性に問題⑥摂食障害を呈し成長が妨げられている——など。①、②、⑥は小児心身症としてまとめられ、③、④は二次的な生活環境の問題。⑤は自閉症など発達障害の可能性があります。

一人遊びが多かったそうです。就学後も、周りの子となじみず、からかわれるなどいじめの対象にもなっていました。給食が食べられず、家での食事も減って、成長曲線を描いてみると、いじめに合い始めた3年生の頃から身長と体重の伸びが極端に鈍化していました。

このように、腹痛、下痢、動悸き、めまいなど身体症状を訴えて来院する「小児心身症」の患者さんですが、生活環境になじみずに困難を抱えている事例が目立ち、背景に自閉症やADHD（注意欠陥・多動性障害）などの発達障害があると考えられることも少なくありません。

### 独協医大越谷病院子どもこころ診療センター教授・作田亮一

さくた・りょういち 1956年、東京都生まれ。日本大医学部卒。同大板橋病院、国立精神・神経センター神経研究所研究員などを経て、現職。小児科と精神科の枠を超えたネットワーク作りに力を入れる。



患者さんやご家族のニーズに応えるために診療態勢を強化していますが、当センターのみですべて解決することは不可能。県や国を挙げて取り組むべき問題を多く含んでいるのです。